下仁田町自然史館研究報告　第10号，61-62（2025年）

コラム

えっ「あとくら」？

－地名を読み違えた地層名－

保　科　　裕*
Hiroshi Hoshina

地層や岩体には，国土地理院発行の地形図に載っている地名を使って，名まえがつけられています．下仁田町は全国的に有名なクリッペや中央構造線があるので，下仁田町の地名がつけられた地層や岩体がけっこうあるのです．「跡倉層」や「四ッ又山石英閃緑岩」などがそうです．名まえをつけるのは研究者で，その地層や岩体の分布する場所の地名を使います．つけた名まえには先取権があって，やたらに変えることはできません．やっかいなことに，読み方がまちがっていることがけっこうあります．下仁田町にある地層や岩体で，間違った読み方の名まえがつけられてしまった三つの例を紹介します．

御荷鉾緑色岩

下仁田町の青岩公園の岩畳をつくる青岩は，「御荷鉾（みかぶ）緑色岩」と呼ばれています．この“みかぶ”が，たいへん厄介なのです．関東山地団体研究グループ（2002）に書かれている説明をもとに解説します．

「御荷鉾緑色岩」は，当時「御荷鉾系」としてKoto（1888）によって命名されました．この緑色岩が，群馬県の南西部にある信仰の山「御荷鉾山」周辺にひろく分布していたため，この山の名まえをつけました．“御荷鉾”は，西御荷鉾山の登山口にある御荷鉾山の碑に「日本武尊東征の折のホコヲニナハセタマフの語に因る」に記されており，この漢字があてられたようです．この“御荷鉾”の読みは「みかぼ」です．しかしKoto（1888）の英文論文では，“mikabu”と表記されています．そのため，地質学界では，「御荷鉾」は“みかぶ”と読むことになります．これが単なる読み違いかというと，そうではなさそうです．御荷鉾山付近の調査のとき，高崎営林署の看板に「三ヶ舞」と書かれていたのを見つけました（第1図）．この読みは，あきらかに“みかぶ”です．また，ガイドブックやインターネットの登山案内では，東御荷鉾山，西御荷鉾山，オドケ山の三山（第2図）を「三株（みかぶ）山」

第1図　「三ヶ舞国有林」高崎営林署の看板

第2図　三株山　二子山より撮影　1988年5月8日

2025年2月9日受付．2025年2月10日受理．
＊下仁田自然学校：nenashi@juno.ocn.ne.jp　〒370-2611　群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1　下仁田町自然史館内
保科　裕：mikabogreen@jcom.home.ne.jp

と呼ぶと書いてあります．御荷鉾山をとり巻く地域で，それぞれ違った呼び名（なまりや方言）になっていたのでしょう．呼び名の発音が先で，漢字はあとからついたのです．小藤文次郎氏は地元の方から“みかぶ”と聞いていて，この緑色岩の摸式地周辺に「御荷鉾山」があったため，これを漢字として当てはめてしまったのかもしれません．

跡倉層

「跡倉層」は“あとくらそう”として，正式な地層名となっています．地元の方々なら，この集落の呼び名は，当然“あとぐら”です．研究論文のなかで，最初に“あとくら”と表現してしまったのは藤本ほか（1953）の論文です．そこには，英文要旨の表記で，“Atokura”と書かれています．跡倉礫岩はたいへん興味深いために，この論文より前の1930年代から研究がおこなわれていましたが，いまわしい戦争状況でほとんどが論文にはなっていません．佐渡道隆（1938）や杉山隆二（1943）の報告はありますが，ルビも英語表記（当時のご時世のため）もないので，なんと呼んでいたかはわかりません．戦後の藤本ほか（1953）の公表以降，跡倉層は“あとくらそう”として，地質学界で通用してしまっています．佐藤ほか（1990，2015，2018）は，この誤りを“あとぐら”に改めることを提唱しています．

平滑花崗岩

平滑花崗岩は，地質学では“なめえかこうがん”と読んでいます．下仁田町の滑（なめ）付近は，花崗岩が露出しています．この花崗岩体の名まえは，新井ほか（1966）によって「平滑（なめえ）花崗岩」と命名されました．論文では，“なめえ”とルビがふられています．佐藤ほか（2015，2018）による役場や地元の方からの情報では“なめえ”と発音しないが，地籍図には「平滑」という地名は残っていて地元では「ヒラナメ」と読むそうです．佐藤ほか（2018）は，明らかに誤記であると指摘しています．

地層名の変更

地元の地名の読みかたにならって，正しく地層名を直すことはできないものでしょうか？日本地質学会の地層命名指針の中に，以下の項目があります．

「名称変更・再定義の場合は，新称提唱と同様の手続きとともに，名称変更・再定義の学術的な理由を明確に記述することが必要である．」（1．地層名および層序単元　1.）

論文を執筆する際に，誤っている地層の名称の変更や再定義によって，正しい地層名にしなければならないようです．

〈下仁田自然学校だより「くりっぺ」2020年10月号の記事をもとに書きあらためました．〉

文　献

新井房夫・端山好和・林　信悟・細矢　尚・井部　弘・神沢憲治・木崎喜雄・金　今照・高橋　洌・高橋武夫・武井晛朔・戸谷啓一郎・山下　昇・吉羽興一（1963）群馬県下仁田町の跡倉礫岩を中心とする地質学的研究．地球科学，64：18-31.

藤本治義・渡部景隆・沢　秀生（1953）関東山地北部の推し被せ構造．秩父自然科学博物館研究報告，3：1-42.

関東山地団体研究グループ（2002）関東山地，ミカブ緑色岩類に累重する砕屑岩層－西御荷鉾層の起源と堆積環境－．地球科学，56：333-346.

Koto B (1888) On the so-called Crystalline Schists of Chichibu. Journal of the College of Science, Imperial University, Japan, 2：77-141.

佐渡道隆（1938）群馬県下仁田町付近に発達する跡倉礫岩について（演旨）．地質雑，45：477-478.

佐藤興平・柴田　賢・内海　茂（1990）関東山地北部の新第三系に含まれる花崗岩礫の K-Ar 年代．地質雑，96：125-132.

佐藤興平・柴田　賢・内海　茂（2015）関東山地北縁部の異地性岩塊や礫岩に含まれる珪長質火成岩類の年代：跡倉ナップ実像解明の歴史と今後の課題．群馬県立自然史博物館研究報告，19：69-94.

佐藤興平・竹内　誠・鈴木和博・南　雅代・柴田　賢（2018）関東山地北西縁下仁田地域に産する珪長質火成岩体の U-Pb 年代．群馬県立自然史博物館研究報告，22：79-94.

杉山隆二（1943）群馬県下仁田町附近に発達する所謂跡倉礫岩について．科学博研報，7：1-30.